老年

芥川龍之介

橋場（はしば）の玉川軒（ぎょくせんけん）と云（い）う茶式料理屋で、一中節（いっちゅうぶし）の順講があった。

朝からどんより曇っていたが、午（ひる）ごろにはとうとう雪になって、あかりがつく時分にはもう、庭の松に張ってある雪よけの縄（なわ）がたるむほどつもっていた。けれども、硝子（ガラス）戸と障子（しょうじ）とで、二重にしめきった部屋の中は、火鉢のほてりで、のぼせるくらいあたたかい。人の悪い中洲（なかず）の大将などは、鉄無地（てつむじ）の羽織に、茶のきんとうしの御召揃（おめしぞろ）いか何かですましている六金（ろっきん）さんをつかまえて、「どうです、一枚脱いじゃあ。黒油（くろあぶら）が流れますぜ。」と、からかったものである。六金さんのほかにも、

柳橋（やなぎばし）のが三人、代地（だいち）の待合の女将（おかみ）が一人来ていたが、皆四十を越した人たちばかりで、それに小川の旦那（だんな）や中洲の大将などの御新造（ごしんぞ）や御隠居が六人ばかり、男客は、宇治紫暁（うじしぎょう）と云う、腰の曲った一中の師匠と、素人（しろうと）の旦那衆（だんなしゅ）が七八人、その中の三人は、三座の芝居や山王様の御上覧祭を知っている連中なので、この人たちの間では深川の鳥羽屋の寮であった義太夫（ぎだゆう）の御浚（おさら）いの話しや山城河岸（やましろがし）の津藤（つとう）が催した千社札の会の話しが大分賑やかに出たようであった。

　座敷は離れの十五畳で、このうちでは一番、広い間らしい。籠行燈（かごあんどん）の中にともした電燈が所々に丸い影を

神代杉の天井にうつしている。うす暗い床の間には、寒梅と水仙とが古銅の瓶にしおらしく投げ入れてあった。軸は太祇の筆であろう。黄色い芭蕉布で煤けた紙の上下をたち切った中に、細い字で「赤き実とみてよる鳥や冬椿」とかいてある。小さな青磁の香炉が煙も立てずにひっそりと、紫檀の台にのっているのも冬めかしい。

その前へ毛氈を二枚敷いて、床をかけるかわりにした。鮮やかな緋の色が、三味線の皮にも、ひく人の手にも、七宝に花菱の紋が抉ってある、華奢な桐の見台にも、あたたかく反射しているのである。その床の間

の両側へみな、向いあって、すわっていた。上座（じょうざ）は師匠の紫暁（しぎょう）で、次が中洲の大将、それから小川の旦那と順を追って右が殿方、左が婦人方とわかれている。その右の列の末座にすわっているのがこのうちの隠居であった。

　隠居は房（ふさ）さんと云って、一昨年、本卦返（ほんけがえ）りをした老人である。十五の年から茶屋酒の味をおぼえて、二十五の前厄（まえやく）には、金瓶大黒（きんぺいだいこく）の若太夫と心中沙汰になった事もあると云うが、それから間もなく親ゆずりの玄米（くろごめ）問屋の身上（しんじょう）をすってしまい、器用貧乏と、持ったが病の酒癖とで、歌沢の師匠もやれば俳諧の点者（てんじゃ）もやると

云う具合に、それからそれへと微禄(びろく)して一しきりは三度のものにも事をかく始末だったが、それでも幸に、僅な縁つづきから今ではこの料理屋に引きとられて、楽隠居の身の上になっている。中洲の大将の話では、子供心にも忘れないのは、その頃盛りだった房さんが、神田祭の晩肌守(はだまも)りに「野路(のじ)の村雨(むらさめ)」のゆかたで喉をきかせた時だったと云うが、この頃はめっきり老いこんで、すきな歌沢もめったに謡(うた)わなくなったし、一頃凝った鶯もいつの間にか飼わなくなった。かわりめ毎に覗き覗きした芝居も、成田屋(なりたや)や五代目がなくなってからは、行く張合(はりあい)がなくなったのであろう。今も、黄いろ

い秩父の対の着物に茶博多の帯で、末座にすわって聞いているのを見ると、どうしても、一生を放蕩と遊芸とに費した人とは思われない。中洲の大将や小川の旦那が、「房さん、板新道の――何とか云った…そうそう八重次お菊。久しぶりであの話でも伺おうじゃありませんか。」などと、話しかけても、「いや、もう、当節はから意気地がなくなりまして。」と、禿頭をなでながら、小さな体を一層小さくするばかりである。

それでも妙なもので、二段三段ときいてゆくうちに、「黒髪のみだれていまのものおもい」だの、「夜さこいと云う字を金糸でぬわせ、裾に清十郎とねたところ」

だのと云う、なまめいた文句を、二の上った、かげへかげへとまわってゆく三味線の音（ね）につれて、語ってゆく、さびた声が久しく眠っていたこの老人の心を、少しずつ目ざませて行ったのであろう。始めは背をまげて聞いていたのが、いつの間にか腰を真直に体をのばして、六金さんが「浅間（あさま）の上（じょう）」を語り出した時分には、「うらみも恋も、のこり寝の、もしや心のかわりゃせん」と云うあたりから、目をつぶったまま、絃（いと）の音にのるように小さく肩をゆすって、わき眼にも昔の夢を今に見かえしているように思われた。しぶいさびの中に、長唄や清元にきく事の出来ないつやをかくした一中（いっちゅう）

の唄と絃とは、幾年となくこの世にすみふるして、すいもあまいも、かみ分けた心の底にも、時ならない情（なさけ）の波を立てさせずには置かないのであろう。

「浅間の上」がきれて「花子」のかけあいがすむと、房さんは「どうぞ、ごゆるり。」と挨拶をして、座をはずした。丁度、その時、御会席で御膳が出たので、暫くはいろいろな話で賑やかだったが、中洲の大将は、房さんの年をとったのに、よくよく驚いたと見えて、

「ああも変るものかね、辻番の老爺（おやじ）のようになっちゃあ、房さんもおしまいだ。」

「いつか、あなたがおっしゃったのはあの方?」と六

金さんがきくと、
「師匠も知ってるから、きいてごらんなさい。芸事にゃあ、器用なたちでね。歌沢もやれば一中もやる。そうかと思うと、新内(しんない)の流しに出た事もあると云う男なんで。もとはあれでも師匠と同じ宇治の家元へ、稽古に行ったもんでさあ。」
「駒形(こまがた)の、何とか云う一中の師匠——紫蝶ですか——あの女と出来たのもあの頃ですぜ。」と小川の旦那も口を出した。
　房さんの噂はそれからそれへと暫くの間つづいたが、やがて柳橋の老妓の「道成寺」がはじまると共に、座

敷はまたもとのように静かになった。これがすむと直ぐ、小川の旦那の「景清」になるので、旦那はちょっと席をはずして、はばかりに立った。実はその序（ついで）に、生玉子でも吸おうと云う腹だったのだが、廊下へ出ると中洲の大将がやはりそっとぬけて来て、

「小川さん、ないしょで一杯やろうじゃあ、ありませんか。あなたの次は私の「鉢の木」だからね。しらふじゃあ、第一腹がすわりませんや。」

「私も生玉子か、冷酒（ひや）で一杯ひっかけようと思っていた所で、御同様に酒の気がないと意気地がありませんからな。」

そこで一緒に小用(こよう)を足して、廊下づたいに母屋の方へまわって来ると、どこかで、ひそひそ話し声がする。長い廊下の一方は硝子障子(ガラスしょうじ)で、庭の刀柏(なぎ)や高野槇(こうやまき)につもった雪がうす青く暮れた間から、暗い大川の流れをへだてて、対岸のともしびが黄いろく点々と数えられる。川の空をちりちりと銀の鋏(はさみ)をつかうように、二声ほど千鳥が鳴いたあとは、三味線の声さえ聞えず戸外(そと)も内外(うち)もしんとなった。きこえるのは、藪柑子(やぶこうじ)の紅い実をうずめる雪の音、雪の上にふる雪の音、八つ手の葉をすべる雪の音が、ミシン針のひびくようにかすかな囁きをかわすばかり、話し声はその中をしのび

やかにつづくのである。
「猫の水のむ音でなし。」と小川の旦那が呟いた。足をとめてきいていると声は、どうやら右手の障子の中からするらしい。それは、とぎれ勝ちながら、こう聞えるのである。
「何をすねてるんだってことよ。そう泣いてばかりいちゃあ、仕様ねえわさ。なに、お前さんは紀の国屋の奴さんとわけがある……冗談云っちゃいけねえ。奴のようなばばあをどうするものかな。さましておいて、たんとおあがんなはいだと。さあそうきくから悪いわな。自体、お前と云うものがあるのに、外へ女をこし

らえてすむ訳のものじゃあねえ。そもそもの馴初(なれそ)めがさ。歌沢の浚いで己(おれ)が「わがもの」を語った。あの時お前が……」

「房的(ふさてき)だぜ。」

「年をとったって、隅へはおけませんや。」小川の旦那もこう云いながら、細目にあいている障子の内を、及び腰にそっと覗きこんだ。二人とも、空想には白粉(おしろい)のにおいがうかんでいたのである。

部屋の中には、電燈が影も落さないばかりに、ぼんやりともっている。三尺の平床(ひらどこ)には、大徳寺物の軸がさびしくかかって、支那水仙であろう、青い芽をつつ

ましくふいた、白交趾の水盤がその下に置いてある。床を前に置炬燵にあたっているのが房さんで、こっちからは、黒天鵞絨の襟のかかっている八丈の小掻巻をひっかけた後姿が見えるばかりである。

女の姿はどこにもない。紺と白茶と格子になった炬燵蒲団の上には、端唄本が二三冊ひろげられて頸に鈴をさげた小さな白猫がその側に香箱をつくっている。猫が身うごきをするたびに、頸の鈴がきこえるか、きこえぬかわからぬほどかすかな音をたてる。房さんは禿頭を柔らかな猫の毛に触れるばかりに近づけて、ひとり、なまめいた語を誰に云うともなく繰り返して

いるのである。

「その時にお前が来てよ。ああまで語った己(おれ)が憎いと云った。芸事と……」

中洲の大将と小川の旦那とは黙って、顔を見合せた。

そして、長い廊下をしのび足で、また座敷へ引きかえした。

雪はやむけしきもない。……

（大正三年四月十四日）

底本：「芥川龍之介全集1」ちくま文庫、筑摩書房
1986（昭和61）年9月24日第1刷発行
1997（平成9）年4月15日第14刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房
1971（昭和46）年3月〜1971（昭和46）年11月
入力：野口英司
校正：野口英司
1998年2月21日公開
2004年3月13日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。